

高校生が運営する競技会の可能性

帝京高等学校

工藤慶之

1. はじめに

東京都の学校で、部活動として少林寺拳法部が存在している学校数は、高校が 22 校（うち中高一貫校 13 校）、中学校が 2 校である。そのため、東京都中学校体育連盟には加盟できていない。東京都高等学校体育連盟少林寺拳法専門部（以下「本専門部」と略す）では、少林寺拳法部の中学生にも活躍の場を与えるため、本専門部の中に東京都中学校少林寺拳法連盟を創設し、本専門部のメンバーが中心となって大会の運営や合同練習会などを行うなど、中高一貫校や中学校に所属する中学生と本専門部に所属する高校生との連携事業（以下「中高連携事業」と略す）を行っている。この中高連携事業の一環として行っているのが、中学 3 年生および高校生が運営する競技会である。

2. 高校生が運営する競技会

この競技会は、東京都中学校少林寺拳法連盟に所属する 1 年生および 2 年生（以下「選手」と略す）に対し、中学 3 年生および高校生（以下「実行委員」と略す）が企画から運営、指導までのすべてを行うというものである。この競技会を実施するために、実行委員として参加する生徒が 2 回の実行委員会を行い、企画の会議を行った。

このような教員主体の競技会ではなく、生徒主体の競技会を行うことで、選手にも実行委員にもさまざまな効果や可能性があると考えられる。その効果や可能性を検証し、明らかにしていくことで、今後の中高連携事業が活性化し、本専門部の活性化にも繋がっていくものと考え、本研究に至ったのである。



3. 研究の概要

(1) 実施日

平成 27 年 12 月 26 日（土）競技会終了後

(2) 対象者

選手 34 名および実行委員 51 名

(3) 調査方法

質問紙によるアンケート形式

(4) 調査内容

選手

- ① 性別
- ② 参加回数
- ③ きっかけ
- ④ 感想
- ⑤ 選手としての参加
- ⑥ 実行委員としての参加
- ⑦ 意見（自由記述）

実行委員

- ① 性別
- ② 参加回数
- ③ きっかけ
- ④ 感想
- ⑤ 参加の目的
- ⑥ 実行委員としての参加
- ⑦ 意見（自由記述）

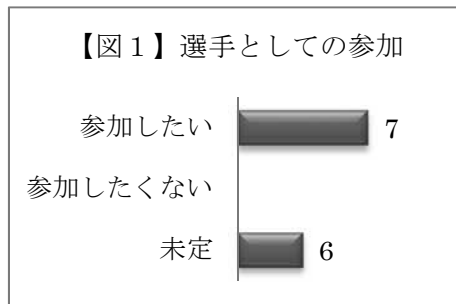


4. アンケートの結果について

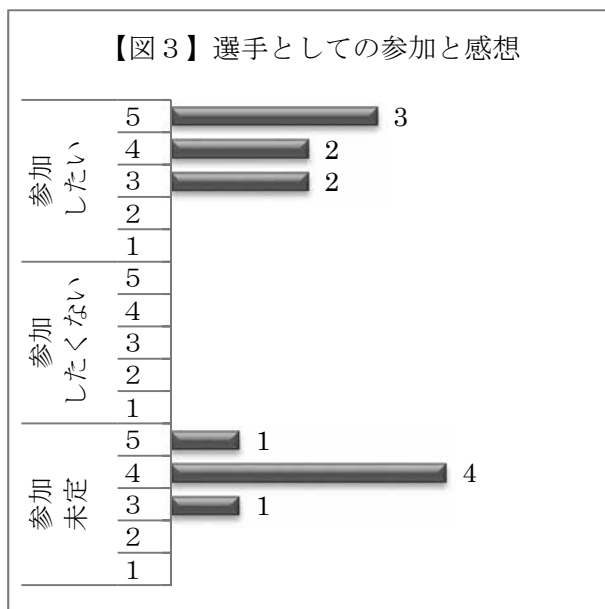
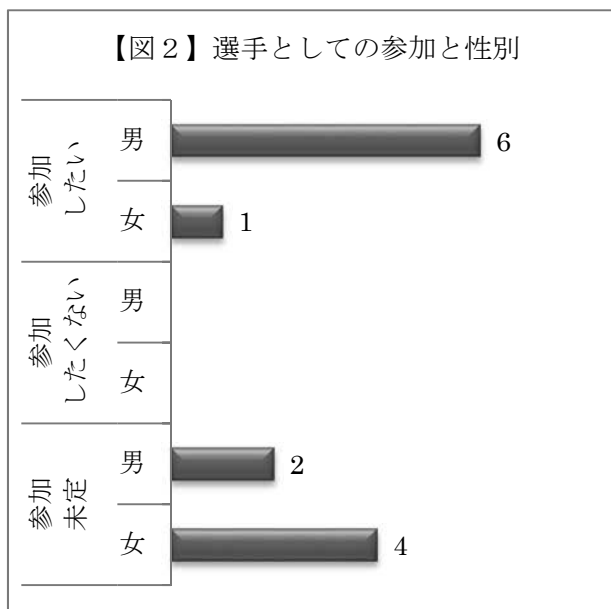
今回のアンケートの集計結果をすべて記載することはできないため、特徴的だったものを紹介していく。

(1) 中学1年生選手を対象にしたアンケートに対する結果

今回参加した選手のうち、中学1年生のみ(13名)を対象にしたアンケートの中で、次年度の選手としての参加に対する結果(【図1】)から分かる通り、「参加したくない」と答えた選手は皆無であった。



また、参加した選手のうち、男子の方が次年度も選手として参加したいと回答した割合が高い(【図2】)ことや、選手全体の感想が全体的に高かった(【図3])ことから、競技会自体が成功し、満足した結果であると考えられる。



この満足した要因として考えられるのが、今回の競技会を行うにあたり、アドバイス用紙を配布したことによるものが大きい。アドバイス用紙とは、採点のみが行われる普段の大会とは異なり、選手に対しての改善点を、審判を行った実行委員から、競技会終了後に選手一人ひとりがもらえるというものである。

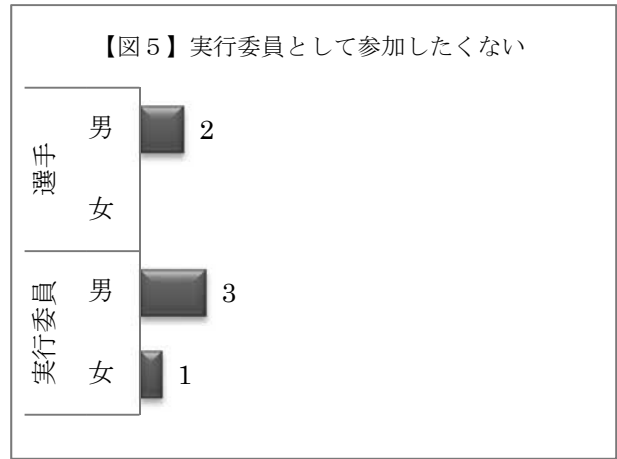
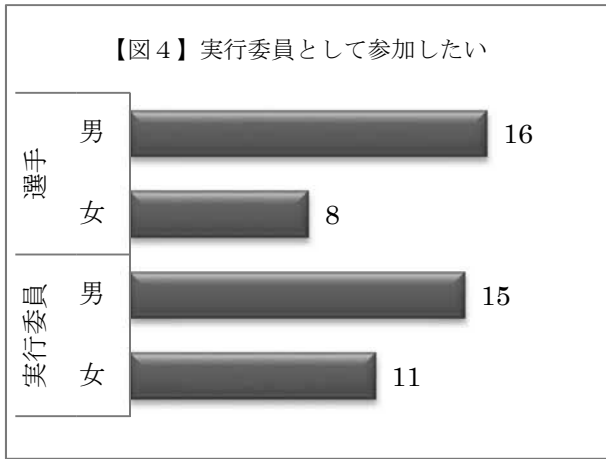
中高一貫校の選手は、普段の練習で自校の先輩に指導をしてもらうことはあるが、他校の先輩(特に関東大会やインターハイなどの上位大会に出場した高校生)に自身の競技の評価をってもらう機会などほとんどない。このような取り組みの結果、中学1年生が、今回の競技会に満足し、次年度の競技会に対する参加意思を示したものである。

(2) 実行委員としての次年度の参加に対するアンケート結果

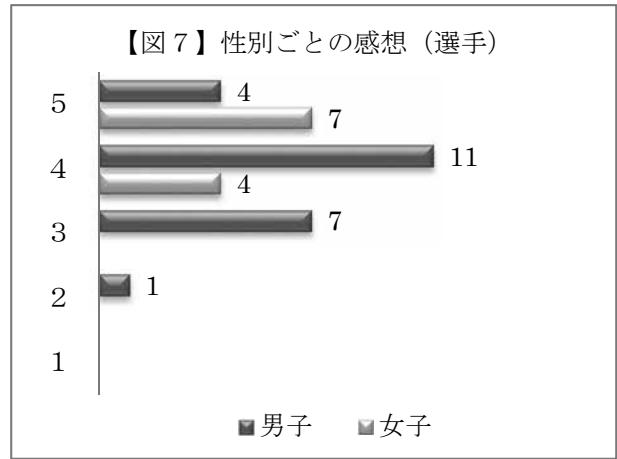
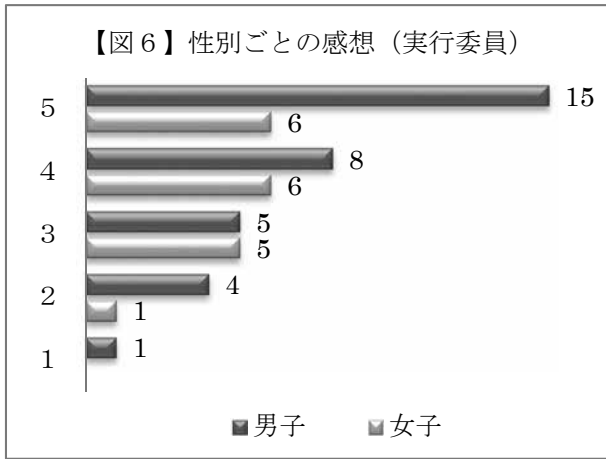
実行委員としての次年度の参加に対する回答について、参加未定を除いて、「性別」「参加回数」「参加のきっかけ」のそれぞれについて集計を行った。

①性別についてのアンケート結果

性別ごとに、アンケートの結果を見る(【図4】・【図5])と、選手および実行委員のどちらにおいても女子の方が参加したいと回答している割合が高いことが分かる。

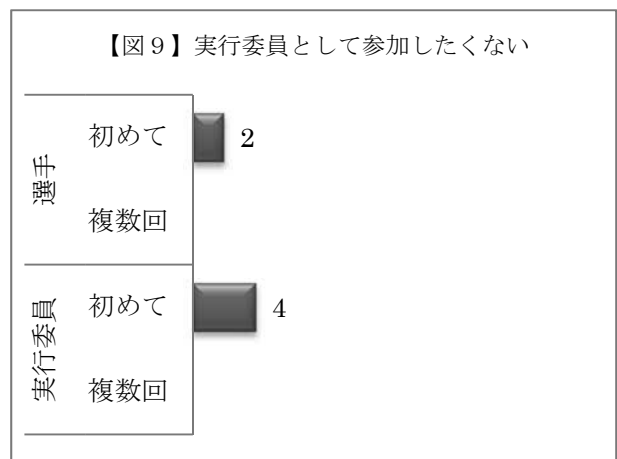
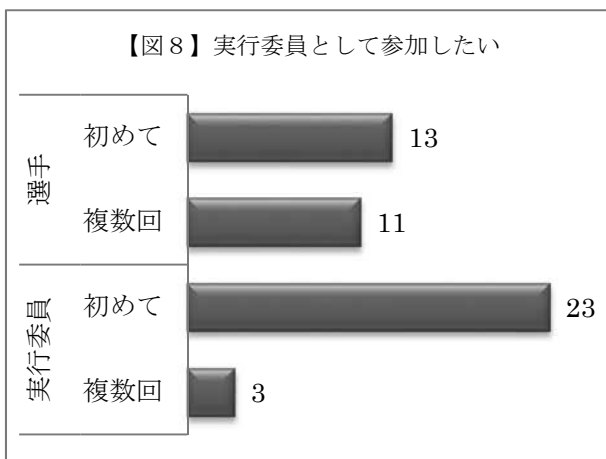


この要因としては、性別ごとの感想（【図6・図7】）からも分かるように、実行委員および選手のどちらも、男子よりも女子の方が今回の競技会に対する感想が高いことが要因であると思われる。

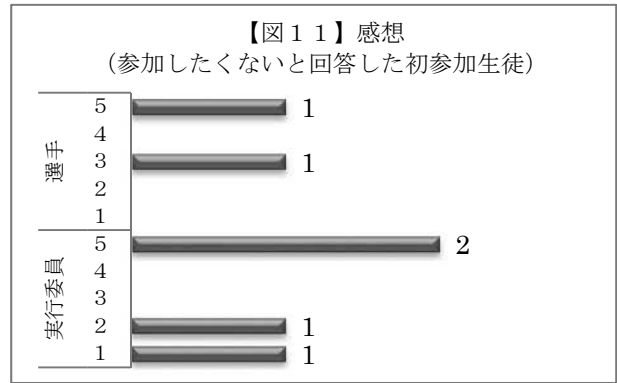
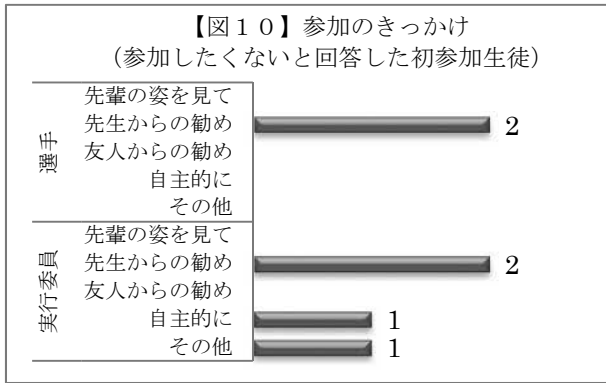


②参加回数についてのアンケート結果

参加回数ごとに、アンケートの結果を見ると（【図8】・【図9】）、選手および実行委員ともに複数回参加している生徒で、参加したくないと回答した生徒は皆無であった。



自主的に参加したにもかかわらず、参加したくないと回答した実行委員がいる（【図10】）ことや、感想が高いにもかかわらず参加したくないと回答した選手や実行委員生徒がいる（【図11】）ことなども集計したことにより明らかになった。

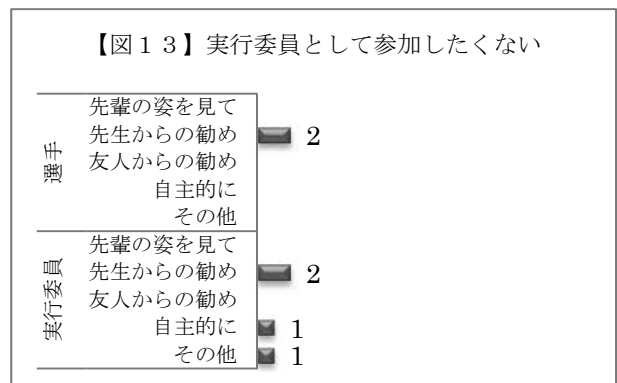
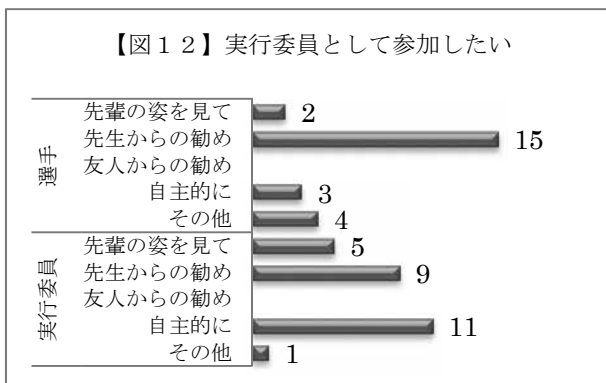


この要因として考えられることは、上記選手の自由記述の中に、「賞状を付箋で済ませるのではなく、手書きで欲しい」「漢字の間違ひはやめてほしい」などと書かれていることから、入賞することが出来たことによって感想は高いが、実行委員会の不手際により、実行委員としては参加したくないと回答したのではないかと考えられる。

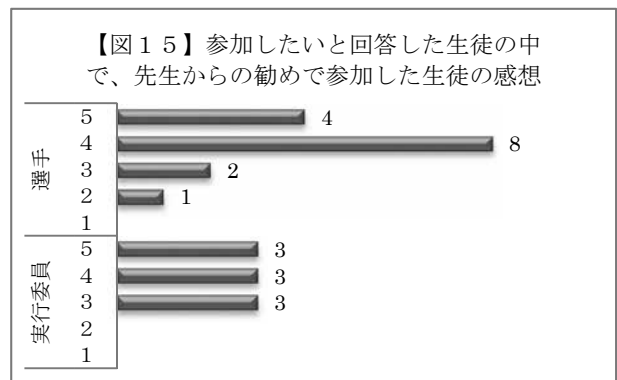
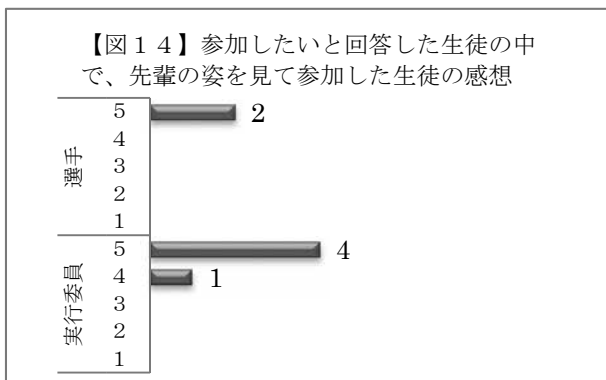
また、実行委員の中には、自主的に参加したり、感想も高評価を回答したりしていたにもかかわらず参加したくないと回答した生徒もいた。要因の1つとして、自由記述に「手伝いに来たのに、仕事をもらえなかった。一部の人だけでなく、全員が参加できるようにしてほしい。」とあり、役割を与えられなかったことへの不満があったと思われる。他の要因としては、高校2年生が同様の回答をしており、自由記述には何も書かれていなかったものの、学年的な要因から次年度の参加は「したくない」というよりはむしろ「しない」と回答したのではないかと考えられる。

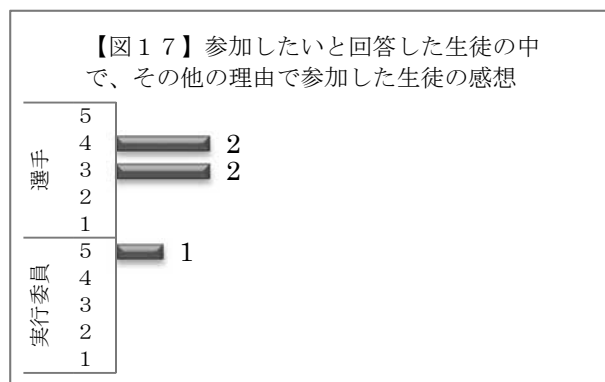
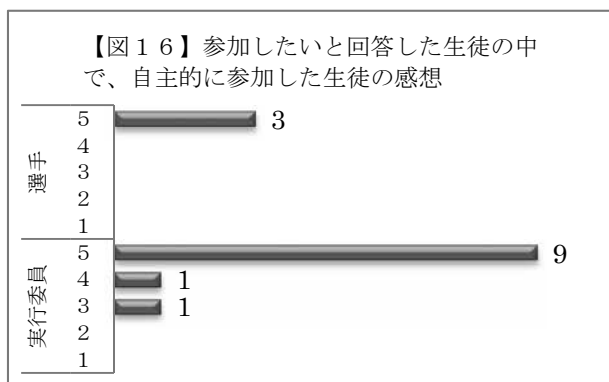
③参加のきっかけについてのアンケート結果

参加のきっかけでは、どのきっかけにおいても多くの選手、実行委員の生徒が実行委員として参加したいと回答している。(【図12】・【図13】)



また、参加したいと回答した生徒について、きっかけごとの感想を調べると、以下のようになった。(【図14】～【図17】)





上のグラフが示す通り、参加したいと回答した生徒は、いずれのきっかけを見ても良い感想を回答している。このことは参加のきっかけにかかわらず、競技会に満足することが、今後の競技会において不可欠であることを表しているといえる。

以上がアンケートを集計した結果の中で特徴的だったものであるが、このような結果から、以下の3点のことが見えてくると思われる。

- ① 選手としての参加割合は男子に多いが、実行委員としての参加割合は女子に多い。
- ② 複数回参加している生徒は、来年度も参加したいという意思を持っている。
- ③ 参加したきっかけがどのようなものであっても、競技会自体に満足すれば、来年度も参加したいと考えている。

このことから、競技会への参加の仕方として、選手としての参加のみでなく、今回のような生徒が運営する競技会に実行委員として参加することによって、女子生徒の競技会への参加率増加の可能性、また複数回参加することによる様々な相乗効果の可能性について推察できる。もちろん、相乗効果を得るためには、競技会自体を満足できる場とするための工夫も必要不可欠である。

5. 高校生が運営する競技会のメリットとデメリット

また、アンケートの集計結果や選手および実行委員の意見の中から、競技会に参加する選手および競技会を運営する実行委員双方のメリットやデメリットが見えてきた。

競技会に参加する選手に対するメリットは、通常の競技会とは異なり、採点されるだけでなく自身の良い点や悪い点などを「アドバイス用紙」を通じて多くの先輩に指摘してもらうことができることや、運営する実行委員を間近に見ることで先輩に憧れ、今後の少林寺拳法の継続につながっていくことが挙げられる。

逆にデメリットとしては、実行委員が発案した審査方法による審査に対しての不満が多く、参加人数の減少に繋がってしまう危険性があることである。

また、運営する側の実行委員に対するメリットは、実行委員の中でチーフなどを経験することにより、様々な場所で活躍することのできる人間育成につながっていくことや、審判を経験することで、競技者として競技をするだけでは分からない新たな視点の確保に繋がっていくことが挙げられる。

逆にデメリットとしては、実行委員として参加したにもかかわらず、人数過多のために役割を与えられない生徒がいることで、競技会への参加の意識が薄れてしまうことや、実行委員会が発案した審査の方法が周知されづらいことや自校の選手の審判をする実行委員がいるなどの審判の配置に対する配慮のなさなどが目立ち、実行委員会での準備の時間が、教員が行う競技会よりも多く必要になることが挙げられる。

6. 今後の可能性

このような選手および実行委員双方のメリットやデメリットを把握し、双方のメリットの部分を経張させていながら、デメリットの部分を経後の改善点としていくことや、競技会に対する多くの賛否両論の意見を、今後競技会を運営していく高校生がどのように生かしていくかが問われていると思われる。

しかしながら、今回の選手および実行委員の生徒に対するアンケート調査によって、『選手として高体連の競技会に参加するだけでなく、運営する側として競技会に参加する』という、高校生に対しての新たな活躍の場として、高校生が運営する競技会が多くの可能性を秘めていると言える。

7. おわりに

高校生が運営する競技会の可能性については、今後も継続調査を行い、高校生の新たな活躍の場を提供し、選手として参加する生徒だけでなく、実行委員として参加する生徒の活性化につなげ、さらには部活動の活性化そのものにつなげていくことができる可能性がある。

今回の研究が、今後の高校生にとって新たな競技会への参加の方法として、もしくは新たな入部のきっかけとして、多くの専門部の一つの活性化へのヒントとなることができれば幸いである。

